The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	2022年度　意匠学会作品賞選考結果報告
Author(s)	大森, 正夫
Citation	デザイン理論. 2023, 82, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92364
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2022 年度　意匠学会作品賞 選考結果報告

学会賞選考委員会
委員長　大森正夫

受賞作品

佐々木一泰

「46 Rietvelds Chairs」

井上明彦

「つちのいえ：土の創造的可能性と造形教育の実験」

受賞理由

佐々木一泰「46 Rietvelds Chairs」

本発表は，近代オランダを代表する建築家であり家具デザイナーでもある G. T. リートフェルトによる椅子のデザインについて，広く知られているデ・スティル時代の椅子のみでなく，初期から晩年までの全貌をミニチュア椅子の制作を通して検証したものである。

展示では，リートフェルトの活動を 3 つの時代（初期からデ・スティルの理念を具体化した 1929 年まで，デ・スティル活動の終焉から世界恐慌を経た第二次世界大戦下の 1945 年まで，そして息子たちと協働する 1964 年まで）に区分し，それぞれの時代を代表する椅子 46 脚を制作し，その実物を 3 つのテーブルにディスプレイされた。特に，現存資料の読み直しから図面をおこし，素材や制作技法などを丹念に検証した上で，同一の縮尺 1／6 にこだわって再現されたミニチュアの椅子模型の完成度は高く，図面や写真からとは異なる新鮮な発見をもたらしていた。またミニチュアの椅子と解説用テキストによる展示は，複雑なデザインの変遷を視覚的に理解しやすく導く立体的なダイアグラムとしての効果も出しており，示唆に富む展示構成への工夫も高く評価された。

図版や図面では見過ごされがちな実制作による検証と発見についての発表は，フィジカルな現物を展示するパネル発表の形式であったことによって，検証結果に伴う言説にも説得力が増しており，本発表が意匠学会作品賞の授賞に相応しいとの評価となった。

井上明彦「つちのいえ：土の創造的可能性と造形教育の実験」

本発表は，高速道路建設に伴い破壊される古民家や竹林からの大量の土や竹を，多様な環境造形に活用するアートプロジェクトを発端に，その活動を造形教育の中に取り入れ実

践してきた13年間にわたる成果報告である。

展示では，2008年に始まった自主的なアートプロジェクトから2010年の代表作「アクアカフェ」を経て「つちのいえ」へと発展していく変遷やそこでの活動概要を説明したパネルと，これまでの活動のドキュメンテーションを単行本化した記録集「つちのいえ 2008–2021」が掲示されており，プロジェクトの全貌を概観することできた。また，展示物のみでは理解し難かった活動を通しての芸術的意義や具体的な成果などについては，口頭発表での論説により補完がなされた。

プロジェクト「つちのいえ」は，「つち」という素材（質料）を「いえ」というかたち（形相）へと具体化するプリミティブな創作作業を通して，造形と自然と人とのかかわりを改めて捉え直そうとしたものである。本プロジェクトの活動を美術・工芸・建築・デザイン・土木・伝統技術などの幅広い領域のプラットフォームとして位置づけ，領域横断性と持続可能性をもつ循環型社会への提案も込めて造形教育に活用していたことからも，現代社会に対する価値意識の転換やサステナブル・デザインの活動実践としても高く評価できるものである。上記の理由により本発表が意匠学会作品賞の授賞に相応しいとの評価となった。

選考経緯

本作品賞は2022年度の意匠学会大会におけるパネル発表作品が対象である。選考は，学会賞選考委員会の作品賞担当である川島洋一委員と益岡了委員が発表作品に関与するとの理由により辞退されたことから，大森正夫委員長，滝口洋子委員，佐藤博一委員に，役員会の議を経て塚田章副会長と編集委員会の伊原久裕委員が加わる5名によって審議した。

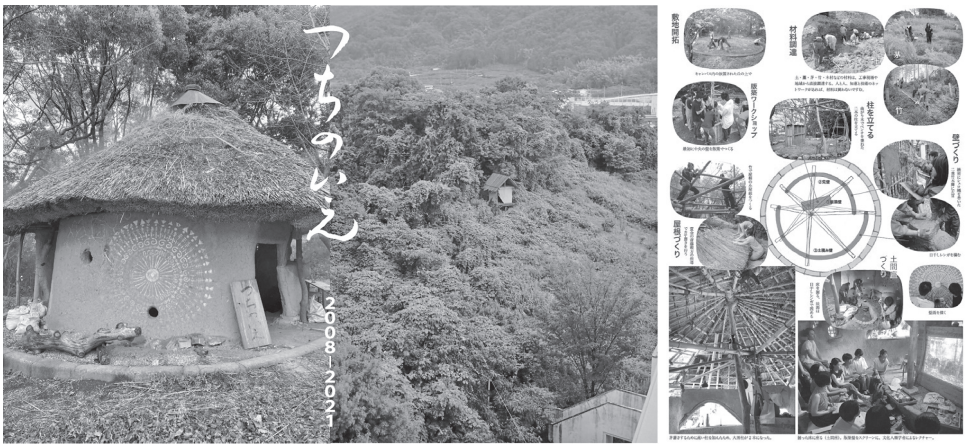
今年度は，会場に赴くことができない会員へのオンライン配信の下，観覧者も多く集まる立地に加え，展示スペースにも設備管理にも恵まれた会場環境の中で各パネル発表の特徴を活かせる展示となっており，3年ぶりとなる現物展示を前にした対面形式での口頭発表は質疑も多く活発な遣り取りがなされた。

選考委員会による審議は大会終了後にそれぞれの見解の論述を集約した上で行うことにした。その方法は，まずパネル発表された7作品のリストに推薦順位（1位〜3位程度，1点のみも可）を記入した上で，その上位候補発表を中心に評論を記してもらった。その結果，4つのパネル発表に票が入っていたが，選考委員との意見交換を経て，得票が特出していたパネル発表1の「46 Rietvelds Chairs」とパネル発表5の「つちのいえ」の2点について議論を進めることになった。

今回のパネル発表は，件数の上でもそれぞれの発表内容の面からも充実したものが多く，その中でも候補に挙がった2作品については1大会としての評価を超え，意匠学会のパネ

ル発表として内容的にも高く評価されるものであった。特に候補の 2 作品については，歴史的デザイナーの作品研究と会員本人によるアートプロジェクトの紹介という異なる発表内容に加え，研究制作物そのものの展示とフィールド活動のドキュメンテーションをパネルと書物で発表するという異なる展示方法であり，評価軸を変えての優劣審議によって，一方の発表内容を否定せざるを得ないことは多様化する意匠学会の将来のためにも相応しくないとの意見から，多視点的な評価を今後の活性化のためにも示すべきとの意見に委員全員が一致し，佐々木一泰氏の「46 Rietvelds Chairs」と井上明彦氏の「つちのいえ」の 2 点を本年度の意匠学会作品賞に選出した。

佐々木一泰氏の「46 Rietvelds Chairs」



井上明彦氏の「つちのいえ」